

鹿児島高等農林学校における田之神舞の意義

鹿児島大学 今 由佳里

はじめに

鹿児島大学郡元キャンパスのほぼ中央に位置し、玉利池と木々が密集する一角に

「布久思の杜」と呼ばれる場所がある。そこには、木漏れ日を浴びながら天を見上げて微笑む一体の「田之神像」が、左足を軽く踏み出し、今にも踊りだすかのような躍動感を持って佇んでいる（写真1）。これは、鹿児島大学農学部の前身である鹿児島高等農林学校の学校行事「新嘗祭」の折に演じられた神楽「田之神舞」の姿を模して、大正14年に彫られた作である。

鹿児島高等農林学校では、明治の開校時から昭和の初めまで、学校行事の一環として毎年新嘗祭を執り行い、田之神舞を全校生が目にする機会を設けていた。後年の同窓会誌をみると、神職によって演じられる田之神舞の厳粛な雰囲気について思い出として記している学生は少なくなく、農学に関する技術的、理論的な学びのみならず、文化的な側面も配慮した教育が施されていたことがうかがえる。

本稿では、鹿児島高等農林学校における田之神舞について、残された資料からその意義について考察を試みたい。



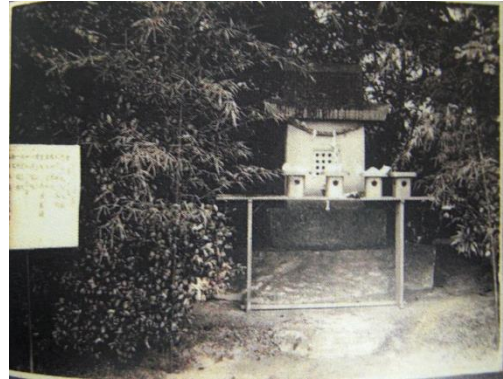
【写真1 田之神像】

1 鹿児島高等農林学校と「田之神」

「田之神」は、稲を守護する神である。田を守り稲作の豊穰をもたらす神は、米食を主とする日本では、全国各地で様々な形で信仰され、それに伴う行事や祭りも多い。旧薩摩藩の領地（現在の鹿児島県全域と宮崎県の南西部）には、江戸時代から田を守り、稲の豊作をもたらす神として田之神像を祀る独特の風習があり、現在でも1500体を超す石像が残されてある。それらは、田の畦道や水路の周辺、田を見下ろす小高い丘に置かれ、南九州独特ののどかな田園風景を現在もつくりだしている。

鹿児島大学郡元キャンパスは、明治42年に開校した鹿児島高等農林学校の校地を引き継ぎ現在に至っている。荒田という地名が示すように、高等農林学校が創設される以前から、この付近では水田が営まれており、田之神像も他の農村地域と同様に幾つか点在していた。高等農林学校創設の校地整備時には、校内の敷地にあった田之神像は全て現在の田之神像が設えられてある「布久思の杜」近辺に集められ、祀られたという歴史がある¹。

布久思の杜には古い石の祠（写真2）もあり、^{ふくしのみや}布久思宮と称した。これは昭和の初め、万葉集の雄略天皇の歌から「布久思宮」という字があてられたという経緯がある。この布久思宮は、戦中、学校の守護神のような扱いを受けて、学校の式日や行事日には全校職員学生揃って参拝した歴史もある。戦後、学校内における宗教追放により田之神像とともにこの祠も土の中に埋められることとなったが、昭和30年代の工事中に田之神像は土の中から姿を現し、現在目にすることができるようになった。しかし、この祠に関しては現在まで見つかってはおらず、土の中に埋まったままである。



【写真2 布久思宮（高農写真帳（他）（昭和13年）より転載）】

2 薩摩の田之神

田之神像を祀る田之神信仰は、南九州の農村地帯、旧薩摩藩領内にのみ見られる薩摩独特の風習であることは前述したとおりである。薩摩の方言も入り、この像のことを人々は親しみを込めて「タノカンサア」と呼んでいる²。

米食を基本とする日本では、それぞれの地域において様々な形で五穀豊穡を願う祈りや感謝の祭り、守護神がみられる。現代は、農地の改良や技術の進歩のおかげで生産性は向上しているが、日本の南端に位置する薩摩地方では、土質がシラス層であること、また台風の通り道といった厳しい自然条件が重なったため、豊穡を願う気持ちは他の地の人々よりも切実だった。また、薩摩藩に年貢米を納めていた時代は、豊穡の祈りはより強かったものと推察できる。そのことを象徴するかのよう、現在でも田の畦道や水路の傍、小高い丘の上には1500体を超す田之神像が残され、水田を見守っている³。

2. 1 鹿児島高等農林学校の田之神像

薩摩の田之神像は、神像型と仏像型に大きく二分できる。さらに立像タイプと座像タイプに分けられ、旅僧姿、神職姿、田之神舞姿などに分類できる⁴。鹿児島大学郡元キャンパスは、農学部の前身である鹿児島高等農林学校の校地を引き継いでいる。キャンパスには、現在二体の田之神像が見られる。一体は前述した田之神舞を模した大正時代の田之神像（写真1参照）、そしてもう一体は、江戸後期から明治時代の田之神像（写真3）である。この写真3の田之神像は、鹿児島大学農学部の前身である鹿児島高等農林学校がこの地に居を構える前から鎮座されていた御神像である。



【写真3 江戸後期から明治時代の田之神像】

大正時代に完成された田之神像は、鹿児島高等農林学校の学校行事である新嘗祭において、神職によって奉納された田之神舞を模したものである事は前述している。この大正時代の田之神像について下野は「スタとよぶ釜蓋を被り、襦袢、上衣、袴、袴姿のこのタノカンサアは、右手に鈴を持ち、西の空を見上げて哄笑している」⁵と、その姿を形容している。下野は左手に関して、こぶしを握っているため御幣でも差し込むのであろうかと言及しているが、制作年に近い大正時代のアルバムを確認すると、左手には「めしげ（しゃもじ）」が握られていることがわかる（写真4参照）。大正6年3月の『校友会報』第6号には、「田の神の舞手は鈴と眞黒な飯杓子を持っている、柄の方を白紙で巻いて握っている」⁶との記述が見つけれられる。



【写真4 田之神像（卒業アルバム（あらた）（大正14年卒）より転載）】

2. 2 田之神舞の起源

鹿児島における田之神舞の起源は不明とされている。最古の田之神像がつくられたと考えられる頃の書物に、延宝七年（1679）の蟻穴和尚による『神舞書』があるが、そこには田之神舞の文言は見られない。薩摩藩主島津重豪が曾槃らに命じて編纂した江戸時代の代表的な農書である『成形図説』には、田之神舞が描かれている（図1）。これは、1801年頃から30年にわたり草稿がまとめられているため、1700年代には舞われていたことが推察できる⁷。



【図1 『成形図説』に描かれた「田ノ神舞」（鹿児島大学附属図書館玉里文庫蔵）】

3 鹿児島高等農林学校の学校行事「新嘗祭」における田之神舞

鹿児島高等農林学校初代校長について編纂された『玉利喜造先生伝』では、学校行事と

儀式の項目において「専門学校、大学においては講義と実験実習が主で学校行事と言えれば入学式と卒業式程度であろう。各種の行事を学校教育に生かそうと数多くの学校行事を実施したのは玉利教育の一特色であった」⁸と振り返られている。その言葉通り、鹿児島高等農林学校の行事は多種多様であり、講義はじめや鏡開き、そして開校記念日と新嘗祭が実施されていた。

鹿児島高等農林学校では、明治44年11月23日に開校式を挙行了したのでこの日を開校記念日として開校記念式典と同時に五穀豊穰を祝う新嘗祭を併せて行うようになった。そして、新嘗祭においては、鹿児島の伝統芸能である田之神舞を奉納するのが昭和の初めまで実施されてきた。これは、「玉利校長は専門学校においても教科授業のみでは完全教育はできないとして授業以外の行事にも力を注いだ」と、後に『玉利喜造先生伝』に記述されている。『開校二十五周年記念鹿児島高等農林学校沿革誌』には、新嘗祭について以下の文言が記述されている。

新嘗祭は畏くも 天皇陛下親ら天神地祇に新穀を捧げ給ひ親らもそれを聞食させ給ふ祭典なるを以て、本校にては明治四十四年十一月二十三日初ての開校式に際し當年の新穀を始め多数の産物を供へて神祇を祀れり。爾來毎年十一月二十三日には講堂に祭壇を設けて古調を帯びたる田之神舞を演じしめ、森嚴なる祭典を執行し、溢々敬神崇祖の精神を涵養することに努む。

ここには、鹿児島高等農林学校における新嘗祭が明治44年11月23日の初めての開校式に際して行われ、毎年11月23日に講堂において祭壇を設けて田之神舞を奉納する旨が記されている。なお鹿児島高等農林学校では、田之神舞のほか鹿児島の民俗芸能である棒踊りや薩摩琵琶の弾奏会もたびたび実施されていたことが記録に残されている。

布久思宮の前には、伊勢神宮をはじめとして諸神社へ奉納するための一反ほどの献穀田が校内に設置されてあった。ここで収穫された新米は、新嘗祭の折に供えられている。鹿児島高等農林学校同窓會が発行する『あらた』第32号には、「専ら職員學生によりて栽培し、伊勢大廟其他の神社及宮内省庁に奉納す。新嘗祭典の供物ともなす」とある。初代校長の玉利喜造も老体にもかかわらず、田植祭には早苗を挿したとの記録もある⁹。また、11月23日の新嘗祭に先立ち、11月16日には「献穀田産献穀米本日左宛献送す」との記述があり、宮内大臣、伊勢神宮、熱田神宮、出雲大社、霧島神宮、鹿児島神宮、鶴戸神宮、宮崎神宮、明治神宮、伊瀬色神社に献送された¹⁰。との記録が残っている。



【写真5 献穀田田植（開学25周年記念写真帳より転載）】

3. 1 鹿児島高等農林學校

鹿児島高等農林學校は、「南方開発を使命」として、1908（明治41）年に設立された。初代校長として鹿児島出身であり日本の農学博士第1号の玉利喜造を迎えて翌年開校した¹¹。鹿児島高等農林學校は、盛岡高等農林學校（岩手大学の前身）に次ぐ官立旧制専門学校である。

3. 2 初代校長玉利喜造の教育特色

「玉利校長は専門学校においても教科授業のみでは完全教育はできないとして授業以外の行事にも力を注いだ」とは、後に編纂された『玉利喜造先生伝』に記述されている象徴的な文言である。農学を学び研究するためには、農学に関する理論的、技術的な直接的な面のみならず、文化的な側面を包括して学ぶことを推進したのが、玉利の教育特色であると言える。

鹿児島高等農林學校初代校長の玉利喜造（1856-1931）は、鹿児島市上町で藩士の家に生まれた。西郷隆盛の「しっかい勉強しやいお」という言葉に奮起され19歳で上京し、駒場農学校（第1回）卒業後、アメリカ留学を経て、東京農林學校、帝国大学農科大学で園芸学・畜産学の教授となり、農学博士（第1号）を授与された。盛岡高等農林學校、鹿児島高等農林學校を創設して初代校長を務め、草創期の農学・農政に貢献し、貴族院議員にも任ぜられた経歴を有している。校長として、鹿児島高等農林學校を大正11年6月15日に退任するまで務めた。

鹿児島高等農林學校は、初代校長玉利の教育的な意向が強く反映している。鹿児島市出身の玉利は、鹿児島の風習を学校教育の中にも積極的に取り入れた。薩摩地方独特の田之神像については、校地から排除することなく学内に祀り、新嘗祭には田之神舞を奉納し、その後の直会では、鹿児島地方の秋祭り「ホゼ」に必ず出される甘酒を取り入れた。年初めの始業式には、薩摩琵琶の弾奏会¹²を催し、鹿児島の民俗芸能である棒踊りを観覧する機会も設けられていたことが学校誌に記録されている。農学に関する文化をも包含的に学生に学ばせ、農学に関わるより良き人間を育成することを目指していたのではなかろうか。



【写真6 玉利喜造像（台座には、空襲による機銃弾が命中した弾痕が残されている）】

3. 3 新嘗祭

新嘗祭とは、その年に収穫された穀物に感謝し、また翌年の豊作を祈る皇室の祭儀である。この祭は、宮中の他に天照大神を祀る伊勢神宮をはじめ、全国各地の神社で実施されている。なお、鹿児島高等農林學校では、創立時からこの新嘗祭を学内で執り行っている。

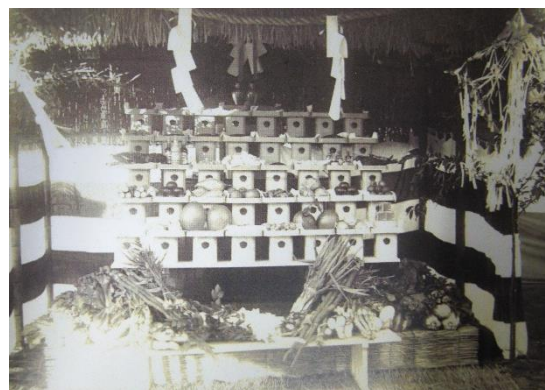
鹿児島高等農林学校の新嘗祭における田之神舞は、明治44年11月23日にその月に竣工した講堂において初めて実施された。以来毎年祭壇を設けて新嘗祭を挙行し、田之神舞を奉納、終わった後は学校農場、演習林生産品による直会が続いた。『あらた』第二十五号創立二十五周年記念号の母校沿革誌を見ると、前年の明治43年11月23日「午前十時より新嘗祭挙行」とあるが、田之神舞が新嘗祭において奉納された記述は見つげられない。しかし、鹿児島高等農林学校創立期から、開校記念式典と併せて神嘗祭が終戦まで学校行事として挙行されていたことはわかる。講堂を祭場に¹³、演壇には祭壇と注連が張られ、榊と御幣を供えている。また、この祭壇には高等農林学校において収穫した新穀米や様々な産物が供えられる。なお祭典において神前に供える品目は、鹿児島高等農林学校各科の実習において実験的に生産した産物や加工品等で毎年50余種に上り、高等農林学校らしい新嘗祭であったことがうかがえる。以下に主な品目を記載する。

○祭壇に供えられた産物

1. 穀物類（玄米〔粳・糯〕、燕麦、黒麦等）
2. 工芸作物（麻、草棉、甘藷等）
3. 根菜類（甘藷、瓜咄薯、牛蒡等）
4. 葉菜類（白菜、深葱、法蓮草等）
5. 果物類（密柑、文旦、檸檬、ネーブル等）
6. 農産加工品（製茶、黒糖、甘酒）
7. 畜産加工品（牛酪、チーズ、ラクタミン等）
8. 林産物（山芋、椎実、椎茸等）
9. 養蚕製造品（繭〔白繭・黄繭〕、生糸、真綿等）



【写真7 鹿児島高等農林学校の講堂】



【写真8 実習で生産加工された品を供えられた祭壇
（開学25周年記念写真帳より転載）】

鹿児島大学農学部に所蔵する創立時からのアルバムを一覧すると、田之神舞は『高農10周年写真帳』『開学25周年記念アルバム』『卒業アルバム（大正14年卒）』『卒業アルバム（昭和3年卒）』『卒業アルバム（昭和7年卒）』に写真が残されている。以下に時系列に沿って、アルバムに記録されている鹿児島高等農林学校の新嘗祭における田之神舞の様子を列挙する。



【写真9 高農 10周年写真帳】



【写真10 卒業アルバム（大正14年卒）】



【写真11 開学25周年記念アルバム】



【写真12 卒業アルバム（昭和3年卒）】



【写真13 卒業アルバム（昭和7年卒）】

本項では、式の記録が残る新嘗祭について概略を述べ、田之神舞の推移を整理する。なお、新嘗祭の次第に関する当時の資料としては、鹿児島高等農林学校校友会発行の『校友会報』、および鹿児島高等農林学校同窓会発行『あらた』に詳細が記されているため、本誌から新嘗祭における田之神舞について抜粋する。なお『校友会報』は、昭和15年で廃刊したため、その後の記録については記念誌等から抜粋している。

3. 3. 1 開校時の新嘗祭（明治44年11月23日）

明治四十四年の開校式記事（鹿児島高等農林学校校友会発行『校友会報』第一號、大正2年7月1日）には、新嘗祭儀式として、以下の記述が見られる（下線は筆者による）。

○新嘗祭儀式

- 一、戌申詔書奉讀
 - 一、校長式辞 教官講話 生徒總代祝辞
 - 一、舞樂
 - 一、校歌合奏
 - 一、天皇陛下萬歳三唱 御眞影閉扉
 - 一、閉式を宣す
 - 一、一同退場
- 以上

ここには、舞樂とのみ記述されているが、田之神舞が奉納されている。昭和49年に編纂された『玉利喜造先生伝』には「田之神舞之儀（神職）奏樂」という文言が記述されており、神職を招き本格的に祭事が行われていた旨が理解できる。儀式の後には、直会にあたる来賓の会食会が催され、校庭にて鹿児島の民俗芸能「棒踊り」が披露された旨も記載されている。

11月23日に開校式を設定して開校記念日としたことは、初代校長の玉利の発意であったとの記録も残されている（岡島銀次『田と神』）。新嘗祭は五穀豊穰を祝う古来よりの祭儀であり、農学を尊ぶ視点から考察すれば、この日に田之神舞を奉納して祭壇に実習地で収穫できた産物を供えることは高等農林学校らしい一場面である。農学、そして高等農林学校の性格を考慮すれば、学校において田之神舞が奉納されたであろうことは、容易に推察できる。

3. 3. 2 開校十周年の新嘗祭（大正8年11月23日）

開校十周年の新嘗祭次第は記述されていないが、『校友会報』第9號に「新嘗祭祭典及び本校創立拾周年祝賀會」の記事が掲載されている。そこから、新嘗祭は午前10時より講堂で學生、職員、来賓のもと「講堂を震はす神樂太鼓につれて、田之神舞は演ぜられ、滿堂忽ちに神さびたる気分のただよへの感あり」とあり、田之神舞が厳粛な雰囲気の中奏されていたことがわかる。



【写真 14 創立十周年記念式典の新嘗祭における田之神舞（高農 10 周年写真帳より転載）】

3. 3. 3 開校 20 周年（昭和 4 年）の新嘗祭

昭和 4 年、開校 20 周年の新嘗祭次第についても、『校友會報』には記述を見つけることができなかったが、11 月 23 日「本日は新嘗祭であり又本校創立二十周年記念日である、午前九時三十分から新嘗祭の式があり田之神舞を奉納し、次に開校記念式があつた（『校友會報』第二十號）」の記述があり、この年も例年通り新嘗祭において田之神舞が奉納されたことがわかる。

3. 3. 4 開校 25 周年の新嘗祭（昭和 9 年）

開校廿五周年記念行事（鹿児島高等農林學校同窓會発行『あらた』第 25 號）では、新嘗祭式は午前八時より記念會館南庭天幕で行われた記録がある。以下は、行事の次第である（下線は筆者による）。

- 一、修祓
- 一、降神
- 一、献饌
- 一、祝詞奏上
- 一、玉串奉奠
- 一、田之神舞
- 一、撤饌
- 一、昇神



【写真 15 野外での田之神舞の様子（開学 25 周年記念写真帳より転載）】

二十五周年の記念式典は、祭場を講堂から記念會館南庭に移し開催された。この記念式典では、開校二十五周年記念會館の寄贈式も行われている。当年の田之神舞の様子として、同誌には「田之神舞と御神楽は例年のことながら神さびてゆかしい」との記録が残されている。

3. 3. 5 開校 30 周年の新嘗祭（昭和 14 年）

開校三十周年記念行事（鹿児島高等農林学校校友会発行『校友会報』第三十號、昭和 14 年）では、新嘗祭々典午前 10 時より講堂で行われた記録がある。以下は、行事の次第である（下線は筆者による）。

二、新嘗祭々典（講堂）午前十時

- 一、校旗入場
- 一、修祓
- 一、降神ノ儀
- 一、献幣
- 一、祝詞（学校長）
- 一、拜禮（校長玉串ヲ捧グ）
- 一、田ノ神舞
- 一、撤幣
- 一、昇神ノ儀

3. 4 鹿児島高等農林学校の田之神舞概要

『鹿児島大学農学部七〇年史』には、「新嘗祭を行うことを恒例とし、毎年祭壇を設け、古調を帯びた『田之神舞』を奉納し、敬神崇祖の精神を涵養することことにつとめ」¹⁴とあり、厳粛な雰囲気で行われていたことが理解できる。鹿児島高等農林学校新嘗祭において奉納された田之神舞については、『玉利喜造先生伝』に詳細が述べられているため、以下に引用する（括弧内の文言は筆者による）。

田之神舞

田之神舞は一式一人で行い、楽は太鼓、筚及び横笛を用い神舞をするのであるが神職の装束は県下の野外にある田之神の代表的なものである。

すなわち身には薄い紺色の麻織の羽織様のもので野袴を着け、赤の太褌をかけ、その両端は長く背に垂れる。翁の面をつけ頭には古い甌篋（こしき）を編み笠のように二つ折りにして冠り、手甲脚襦絆白足袋、手には最初右手に神楽鈴子の房状のものと、左手に飯匙を持ち扇と御幣二本を背の褌に挿す。かくてまず舞台の一侧に座っている。

二人の神職が筚と太鼓ではやすこと一しきり、頃を見て楽屋から装束をつけた三人の神職が舞台に現れ、ハヤシにつれて舞台に舞う、しばらくして楽を止め、前歌よりはじめて論議を高唱しながら舞台を歩む。

「偕又」の所に至れば飯匙を持って左手前方に差し出し後歌の終わりまで唱う。

次に一旦、跪坐して鈴と飯匙を下におき、介添えの助けによって背中御幣日本を右手に扇を左手に持って舞う。ついで扇を投げすて左右両手に御幣一本ずつを持って乱舞する。この間筚と太鼓を打ち鳴らす、舞子は太鼓の調子に合わせて足を踏み鳴らし舞台を廻る。このように約 30 分間舞うのである。（田之神舞の論議については省略）

『玉利喜造先生伝』 pp.211-212 より引用

4 鹿児島高等農林学校における田之神舞の意義

鹿児島高等農林学校における田之神舞の意義は、①農学に関連する伝統行事を知る、②薩摩の伝統文化の保護と人格形成のための教育、の2点に集約できると考察される。

①農学に関連する伝統行事を知る

新嘗祭とは、毎年11月23日に天皇がその年に収穫された新穀を天神地祇に供え、天皇自らも食する宮中祭祀のひとつである。同日、伊勢神宮をはじめ全国各地の神社でも行われている。なお宮中では、神嘉殿の儀の折に神楽歌が奏されている。

前出しているとおり『玉利喜造先生伝』では、「玉利校長は専門学校においても教科授業のみでは完全教育はできないとして授業以外の行事にも力を注いだ」とその教育方針が後年評されている。その年の収穫に感謝し、翌年の豊作を祈念する祭である新嘗祭は、鹿児島高等農林学校の性格に沿った伝統行事であり、学校行事の一つとして取り入れるにふさわしいものと考えられていたことが理解できる。実習で生産および加工して得られた産物を祭壇に供え、式を執り行うことは農学に対する校生の崇高な意識を高めるのに効果があった。講堂に祭壇を設けて神職を招き、実習で得られた生産・加工品を供え、来賓や教職員、全校生が出席する中、新嘗祭を執り行い田之神舞を奏する場面は、多くの卒業生の心に農学にまつわる厳粛な儀式として残っていることが、同窓会誌の記事から読み取ることができた。農学における学びの一連として、また自然の恵みを感謝する儀式として位置付けられるのではなかろうか。玉利が始めた鹿児島高等農林学校独特の学校行事新嘗祭について、同校出身であり、加世田農学校を創設した河邊仲臈は、「高農の新嘗祭」の中で当時を振り返り「此御祭りは我等の農業教育に極めて意義深く大切なものであることを思ひ當校でも年々新嘗祭を行ふて居るのである」との記述を残している。これは、田之神舞や新嘗祭の意義を農業・林業・水産業・畜産業などに関わる学問を志すうえで知る必要があると考えた玉利の教育理念を踏襲し、次世代へと繋がっていることを証明しているものと考えられる。

②薩摩の伝統文化の保護と人格形成のための教育

玉利は、薩摩独特の田之神像を校地から排除することなく学内に祀り、鹿児島地方の秋祭りに必ず出される独特の甘酒を新嘗祭の直会に取り入れていた。また、薩摩琵琶や民俗芸能である棒踊りを鑑賞する機会も設け、薩摩の伝統文化を積極的に取り入れた教育を行っている。さらに、鹿児島高等農林学校では、得業試験¹⁵の一部として各自で調査地を選定した地誌「農村調査」が課せられていた。内容は、地勢・地質、気候、運輸・交通、農業経営、主要作物、生産物取引等であるが、年中行事や神社仏閣、風俗習慣、俗謡などの実地調査も行われた調査資料が現在も鹿児島大学附属図書館に615点保存されている。玉利は、農学を教育研究するためには、それに伴う伝統文化を知ることも必要と考え、新穀を祝う新嘗祭を学校行事に取り入れていた。彼は、知識や理論、技術的な農学を教育するのみではなく、その背景にある風俗習慣も包括した教育研究を行う必要性を感じていた。一般的に農産物の栽培や育種、生産技術の向上、生産物の加工技術や、環境の保全など、主に自然科学に属する学問分野ではあろうが、社会文化に関する点も軽視せずに学校教育

を行った点が豊かな人間性を育むうえでも効果を発揮していたのではなかろうかと考察される。

5 おわりに

初代校長玉利喜造は、「人には寿命があり、また職を替えることや優秀な人材でもその能力を発揮できなければなんの役にも立たない。しかし、図書や標本を所蔵していれば、広く学者や研究者が集まってくるので、その役割は永久的である」と言葉を残している。その言葉通り、鹿児島大学附属図書館では近年、日本では所蔵するところがなく、また世界的にみても希少な古代ギリシャの農事書『ゲオーポニカ』が発見され、話題になった。その農事書には「高農」の所蔵印が押されており、当時の教育研究に対する高い意識が読み取れる。本稿では、田之神舞を手掛かりに鹿児島高等農林学校の教育を探ったが、農学に関わる直接的な理論や技術のみではなく、農学に関わるより良き人間を育成することを目指した玉利の教育方針があったことが考察できた。

【参考文献】

- ・岡島銀次『田と神』鹿児島高等農林学校博物同志會、1934
- ・小野重朗『田の神サア百体』西日本新聞社、1980
- ・鹿児島高等農林学校同窓会『あらた』
- ・鹿児島高等農林学校校友会『校友会報』1-31号、1913-1940
- ・鹿児島大学農学部『開学五十周年記念誌』1961
- ・鹿児島大学農学部『鹿児島大学農学部七十年史』1980
- ・鹿児島大学農学部あらた同窓会『「あらた」七拾五年の歩み：鹿児島大学農学部開学75周年記念誌』1985
- ・鹿児島大学農学部開学100周年記念事業実行委員会『あらた百年の歩み：鹿児島大学農学部開学100周年記念誌』2010
- ・兒玉幸多「農村社会生活の一面」『社会経済史學』第10巻第1號、岩波書店、1940
- ・兒玉幸多『近世農村社会の研究』吉川弘文堂、1953
- ・兒玉幸多「農村社会生活の一面 一明治末年の鹿児島縣下の例」『社会経済史學』第十巻第1號、1940
- ・下野敏見「玉利池のそばのタノカンサア（田の神さま）」『鹿大広報』125号、1991
- ・玉利喜造先生伝記編纂事業会『玉利喜造先生伝』1974
- ・永田政幸『図録 江戸時代の鹿児島藩 田之神像のすべて』斯文堂、2019
- ・丹羽謙二他『旧制鹿児島高等農林学校の底力』2015
- ・橋本達也「鹿大遺産 一布久思の杜から一」『鹿児島大学総合研究博物館 news letter』No.21, 2009, PP.11-12
- ・橋本達也「鹿児島高等農林学校の博物学」『鹿児島大学総合研究博物館 news letter』No.24, 2010, PP.12-13

【謝辞】本稿執筆に際し、神宮司庁広報室広報課長音羽悟氏に貴重な御助言をいただいた。ここに深く感謝申し上げたい。

【附記】本稿は、JSPS 科研費 20K02796 の助成を受けている。

【脚注】

- 1 『開学五十周年記念誌』には、玉利池の辺り一帯は、鹿児島高等農林学校が開校される以前から「ふくし」の森と人々に呼び親しまれていたとの記述がある。
- 2 薩摩の田之神は、盗まれるのを好む神と慕われ、盗まれてもたたらない神との言い伝えがある。不作が続く地域では、豊作の地域に祀られている田之神像を盗みだし、数年後豊作になるとお礼の品とともに元の場所へ返される。盗みには謝礼が必要になるので、村の合議で決め、長く返さないと嫌われて不作になってしまうので3年以内に戻している。どこそこへ宝探しに行ってくるとの書置きが残されていることもあり、ユーモアあふれる薩摩の信仰がうかがい知れる。
- 3 2000年代に入るまで、最古の田之神像は江戸中期の宝永二年（1705）のものと考えられていた。しかし2006年、それよりも61年古い正保元年（1644）建立された田之神像が横川町にて発見されたとニュースになった。紙面では、「薩摩藩の藩政が安定し、開田事業が進むのが1600年代後半という時代考証から田之神像建立は遡っても元禄年間（1688-1704）という説もある（平成16年5月）」と疑問を呈したうえで、田之神像の起源を知る貴重な発見と注目している。
- 4 田之神の分類については、小野重朗『田の神サァ百体』に詳しい。
- 5 下野敏見『南九州の伝統文化』南方新社、2005
- 6 『校友会報』第6号、1917、p.107
- 7 薩摩藩の開田が進むのは寛文年間（1661-73）以降である。
- 8 『玉利喜造先生伝』1974、p.208
- 9 「母校便り」『あらた』第20号、1929、p.94
- 10 『あらた』第三十二号、鹿児島高等農林学校同窓会、p.10
- 11 開校から間もない明治44年10月には、農学科3年生の大修学旅行として朝鮮に向かって出発している。
- 12 新年始業式の折には、講堂において全学生に対して校長の教育勅語解説があり、その後薩摩琵琶の琵琶會という弾奏会が催された。
- 13 『あらた』第25号 p.119には、新嘗祭は午前八時に記念會館南庭天幕とある。開校二十五周年記念會館の寄贈式が行われたため、この年は講堂から場所を移したと考えられる。
- 14 『鹿児島大学農学部七十年史』教育文化出版、1980、p.77
- 15 鹿児島高等農林学校では、「卒業」のことを「得業(とくぎょう)」と言っている。